

東京鷹桜同窓会報



置賜の 山河うるわし 若葉かな

(九川 満)

巻頭の言葉

高橋 忠三

東京鷹桜同窓会副会長
商工企画(株)取締役社長



早苗ヶ原にそびえ立つ、われらの母校が創立70年の輝かしい記念の年を迎えました。皆様と共に喜びを申し上げます。

東京鷹桜同窓会も近年とみに変って参りました。例えば、同窓会の要(カナメ)である事務局メンバーも10年刻みで確実に若返っていることは皆様ご存知の通りです。また、総会は毎年行われるようになり長い間その運営は事務局主体で進められて来ましたが、3年前より輪番制で担当学年に運営をお願いしております。そして、学年ごとの幹事さんのご努力と相まって広範囲の年齢にわたるようになり、しかも男・女の別なくお集り下さるようになりました。皆様のご理解・ご協力の賜物であり、深く感謝する次第です。

昨年6月17日と今年の6月23日に開催された本部の同窓会(早苗ヶ原のつどい)が新しい企画で大変盛会であった由、我々支部でも大いに見習うべきことが、そこにはあるのではないのでしょうか。会員各位のご意見をいただきながら、会の充実を図り、益々の発展を祈念して止みません。

(昭26卒)



農 学 へ の 道

わが道を行く

安 部 浩

東京農工大学助教授



人類が、自らの食糧を確保するために植物を栽培し、動物を飼育した時から、即ち営農を始めた時から有害生物との戦いが始まったといえる。20世紀の半ばになって、近代科学は長年の“宿敵”で

ある雑草を薬剤で防除する方法を考えついた。およそ65年前のこと、米国のシカゴ大学のクラウス博士は、研究室の一人から発根を促進するための植物ホルモンを高濃度で処理したところ、植物が枯れてしまった、さらに興味深いことにクローバは枯死し、小麦はほとんど枯死しなかったという実験失敗の報告を受けた。ホルモンは生長を伸ばすはずのものなのに、濃度を高くすると植物を枯らす作用があるものなのか、その作用は植物の種類によって差があるものなのか、という博士たちの疑問に基づく追試験によって、ついに「生長促進の植物ホルモンは、高濃度になれば植物を枯死させる。そして植物の種類によって作用に差があるので、選択的に枯らすことができる」という重大な発見がなされたのです。このホルモン剤こそ、今日でも使用されている「2,4-D」という除草剤で、広葉植物には害を与えるが単子葉植物であるイネやムギには害を及ぼさないという特異作用を利用したお陰で、日本の水田から広葉の雑草が姿を消したのです。クラウス博士の「失敗の中から新事実を発見」という話はたいへん有名です。「2,4-D」の使用は新たにノビエの繁茂を招きましたが、近代科学はイネとヒエ間でヒエのみをやっつける除草剤を捜し出しました。旧約聖書によると、神がアダムに与えた罰はイバラやアザミの雑草が生い茂る土地であったそうだから、同じ植物の中から雑草だけを抜き取る作業は非常に大変であったことが伺い知れます。神のごとく苛酷な“田の草取り”の労働を課した早苗ヶ原、青春時代を培い、育んでくれた山紫水明の早苗ヶ原、そのオリザロードからの眺めはいつ見ても素晴らしい景色であった。

一方、新規な化学調節剤の開発による新しい栽培技術や農業技術の誕生があります。10年以上の連作小麦から発見された不思議な微生物の利用や、植物を伸ばし畜舎の悪臭を除去する不思議な土の利用などは、その一例を示すものです。米国の名門校ハーバード大学での話ですが、昆虫ホルモンの研究のためチェコスロバキアから留学していた研究員が、実験のため自国から持ってきた昆虫（カメムシの一種）を育てたところ、米国ではどうしても育たないのである。よく観察すると、脱皮はするが巨大幼虫となり、成虫にはならず死んでゆくのである。その原因を探ったところ、飼育容器の底に敷いた紙にあることがわかった。つまり、母国の新聞紙の代わりに米国の新聞紙を使ったため、紙の材料であるカナダ産バルサム・モミに含まれる昆虫の幼若ホルモンが原因であると判明した。このホルモンには、濃度を高くすると成虫にならずいつまでも若々しい姿の幼虫のままで、かつ巨大化する作用があるのです。この物質は、当然害虫の新しい防除法として利用されたばかりでなく、幼虫の巨大化を利用して巨大マユの生産に向けられ、中国ではすでに実用化されている。日本では、昨年頃から釣り餌用の巨大幼虫栽培に応用され、販売されている。昨年、この餌のおかげで岐阜の山奥で大変に楽しい釣りをして来ました。これも現代科学のなせる技です。

21世紀の科学には、食糧安定供給、エネルギー資源確保、環境保全という三つの重要な全人类的な課題が課せられています。しかし、自然科学の研究では、自然の現象を深く考察することで重大な発見を掘り出すことが非常に多い。生物の機能は神秘的であり、それに魅せられない人はいないでしょう。生物の機能を探り、それを応用する農学の研究は、将来ますます重要になってゆくでしょう。そして、自然に恵まれた早苗ヶ原は、「農学というものは実践の科学である」とこの重要性を解き、さらに、農学を考究する若者たちを育てているように思われます。(昭36卒)

先生お元気ですか

既往近來

高橋正太郎先生
(国語)



東京鷹桜同窓会の皆様御無沙汰いたしました。頂戴した会報を読ませて戴きながら、皆様の御活躍ぶりを想い、一人深い感慨の時を過した次第でございます。

顧みますと私が東京の同窓会の方々と初めてお会いしたのは昭和25年初夏、3年生諸嬢の修学旅行で上野の旅館に宿泊した時でした。この旅行には当時の校長故佐藤剛先生が校長会の用務もあって御一緒だったのですが、在京の同窓生諸氏が多数慰問に見えられたのでした。最年長の方でもまだ不惑の年を少し超えられたぐらいでしたらうか、意気軒昂そのものといった激励を戴き、占領下で県下では戦後初の東京方面修学旅行、しかも米持参などの状況による苦労も雲散霧消した思いであったことなど、鮮やかに思い出されてきます。後年装いを新たにした現同窓会の集いにお招きを戴き、元の同僚の方や会員諸氏と歓談の時を過したことも楽しく有難いことで、心から感謝いたしている次第です。

昭和46年春私は退職して千葉県に転住したのですが、いま生を享けて79年目の一刻一刻を、加齢変化を伴う年相応の健康度で、世間的には老人クラブの仕事などしながら我儘に生きております。またこれも年相応ということでしょうか、時々「生きている」と「生きる」の二つの表現の意味の異同を考えさせられたりしています。そしてソクラテスの「汝自身を知れ」孔子の「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんや」など多くの達人の言葉に懼れをなしたり、「生は死の爲の準備である」という言葉に読み当っては、「生きる」という表現のもつ積極的意味の重さのようなものを感じさせられたりしています。その揚句、たとい「愚かなる者は思ふこと多し」といった結果に終るとしても「生涯学習亦可ならずや」と自らに言い聞かせながら本を読んだりしている昨今です。

蕪辭を連ねたことをお詫びし、改めて皆様の弥栄と御会の御発展を心よりお祈り申し上げます。

同窓会の思い出と最近のこと

守谷辰雄先生
(数学)



あれは昭和62年であった。東京支部総会に本部から会長とともに支部長代表を送ることになり、第1回目に私が指名されて出席し鄭重な接待を受け恐縮した次第でした。若い当番学年のアイデアと

努力によって企画運営された盛大な総会を目のあたりに見、深い感銘を受けたところでした。短期間で統合されてしまった長井北高の卒業生と一緒に壇上で校歌を合唱した思い出は今も忘れない。本部の総会も平成元年度から東京支部方式に変わり2年度もともに頗る盛会であったことは嬉しい限りです。同級会に招待を受けることもあるが、あの当時の紅顔の美少年・美少女が頭髮が薄くなったり白いものが混じったり、あるいは適当に腹が出たりと、それぞれに貫禄が出て人間的にも仕事の面でも立派に成長している姿を見るのは嬉しい。これが同窓会総会であると、幅広い年度の人達と逢えるのも、また楽しいものである。

私が母校の県立長井中学から長井北高まで勤めたのは昭和18年4月から35年3月までであるから、ちょうど満28歳から45歳までの良きにつけ悪しきにつけ最も働き盛りのときであった。それだけにことさら印象深いものがある。そして高等学校から去り、あれからもう30年が経つ。このことからおわりの通り私は現在75歳、数え年で喜寿になりました。「気持は若いつもり」と人並に私も思いますが、体は正直です。無理をするなどいつも自分自身に語りかけながら遇している。心と体の健康に個人差があるとはいえ、東京支部長の高橋正二氏は私と同期であるが、心身共に頗る健康で活躍されている姿には驚くほかはない。ちなみに私は今は公職からは一切身を引き、退職校長会の地区の会長・県の副会長、地域づくりの会長、同窓会の支部長、その他地域の会の役員三つ四つに顔を出している。ともあれ年齢相応には元気です。最後に東京支部の会員並びに役員皆様のご健勝を心からお祈りします。



人生の並木道

民俗学入門の頃と柳田国男先生の思い出

吉田 志津

東京鷹桜同窓会副会長



東京鷹桜同窓会の編集委員である丸川 満氏に、ある時「貴女はなぜ民俗学に傾注したのですか」と聞かれました。その時、自分でもその「なぜ?」を改めて考えてみたことを、少し書いてみます。

昭和9年、私は長井高女を卒業しました。その年の夏休みのある日、同年4月に東京の学校に入り、初めて帰省した級友と会いました。そこで驚いたのは、始めから終りまで「長井弁」を一言も聞かなかったことでした。そして、東京弁の発音とアクセントは余りにも変な響きに聞こえたのです。その東京弁の言葉を聞いているうちに、私はわが故郷を非常に軽蔑されたように思えて何とも言えない気持でた。

翌10年、私は実践女専（現実践女子大）の国文科に入学しました。そこで若き日の高崎正秀先生（故人、元国学院大学文学部長）の数多くの授業に接することができました。お若い高崎先生は柳田国男、折口信夫両先生の御説を基礎にして、情熱を傾けて古典の講義をして下さいました。そして引用される資料は、自分がいま使っている方言、くらし万般の中から取りあげられたものでした。「これだ！ よし、これで地方のくらしだって都会のくらしと同等なのだ、ということが立証できるぞ！」ということを発見した時は、本当にうれしく思いました。

ところで、東京出身の人は「どこで何の催物がある」とか、「誰がどこで講演する」ということを見つけてくるのが驚くばかりうまかった。その人たちの知らせで、昭和12年4月～7月、「第二回日本民俗学講座」が、東京駅前の丸ビル7階の一室で毎週木曜日午後6時～9時に開催されることを知り、さっそく通い続けました。13年～14年まで計3回開催されましたが、学校は休んでも丸ビル行はまったくさぼりませんでした。その内容は柳田国男、折口信夫、最上孝敬、山口貞夫、瀬川清子ほか諸先生方の講義と、全国に採集に散ら

ばった方々の報告でした。

私は、昭和14年に学校を卒業し長井に帰りました。それは、郷土の調査をしたかったからでした。しかし、不勉強のため思うように能率が上らず悩んでいた時、在京の級友から上京の誘いがありました。それをもっけの幸いとばかり再度東京へ出ました。そしてすぐ高崎先生をお尋ねして、「柳田先生の所に連れて行って下さい」と嘆願致しました。高崎先生は即座に承知して下さい、日を改めて私を柳田先生の所に連れて行って下さいました。その時の柳田先生の恐しかったこと…。しかし、若さというものはいいものです。「盲蛇物に怖じず」で、そのすぐ後、就職先の御報告、その他のことで柳田先生の御宅に参上いたしましたら、大きな書斎のまん中の大きな机から「さあさあこちらにおいで」と呼んで下さいました。その何とも言えない優しいお声に驚き、きょとんと立っていましたら、「あなたは丸ビルの講座には熱心に通ったんだね」とおっしゃいました。

ちょうどその頃、柳田先生は女子の教育問題を取り上げられた時であり、就職先のことについても学問のできる所を考えて下さったことが何度かございました。しかし、私は学問の分野より実践活動にそれてゆき、先生の御心に背く状態になりました。それでも先生は、その世界の問題などを御相談に参上すると、実に立派なアドバイスをして下さいました。そのような私に、柳田先生は、戦後の昭和24年か25年頃でしょうか、例によりひょっとお伺いした時、「あのね、民俗学も大学の中に一つの講座として確立しないと一人前とは言えないんだよ。それが和歌森（太郎）氏の学校にできるようになったんだよ」と、それはそれは嬉しそうな顔で教えて下さいました。

私は、地方から東京に出て今日まで人並みにくらして来れたのは、柳田先生の御庇護と御高配によるものと、心から深謝いたしております。

なお、御参考までに柳田先生の私の父宛のお葉書を御覧戴ければ幸いです。（昭9卒）



柳田国男略歴

- 1875年 兵庫県神崎郡に生まれる
- 1900年 東京帝国大学法科大学政治科を卒業、
農商務省農務局に入る
- 14年 貴族院書記官長
- 24年 朝日新聞社論説委員
- 32年 朝日新聞を辞して民俗学研究に従事
- 35年 「民間伝承の会」を組織
- 41年 朝日文化賞を受ける
- 47年 民俗学研究所を設立
- 51年 文化勲賞を授与さる
- 62年 逝去
- 著 書 『遠野物語』ほか多数あり、民俗学・
国語学および関連分野に多大な貢献

柳田国男先生から
の父宛のお葉書

美術の小窓



菅野力蔵氏（昭18卒）作 『陸中の海』

ふるさとの素晴らしい食文化

當 麻 葵

東京鷹桜同窓会監査



あやめ満開のふるさと、長井へ急用で帰りました。春夏秋冬いつ帰っても、山のたたずまい、川の流れに心が和みますが、墓参りの帰途、まぶしい緑の中にスグリの赤い房を見つけて思わず手がのび

そうになりました。かたわらのぐみの木を見上げれば真赤なぐみの実。今はさくらんぼの季節ですが、スグリの透明な赤、大きい粒のヒスイの様な緑色を掌の上で転しながら食べた幼い日を懐かしく思い出しました。果物の豊富な山形は、冬でも干柿やリンゴ漬けがあって子どものおやつになっていましたが、手作りのおやつが工夫されていたこと、農繁期の食事やおやつの確保・栄養管理に意を用いられた点で、関東の農村には見られない素晴らしい食文化だなと感心します。

春の農作業の忙しい頃、水につけた種籾米の残りとは大豆・切餅（あられ）を煎ってふきの葉に包み、わらで結んだのを天井からたくさんぶら下げておいて、お茶の時間に一人一個ずつもらって食べるのでした。農家でない私は、友だちの家でおばあさんにもらうその“つと”が楽しみでした。夏はどの地方でも焼きとうもろこしや枝豆がありますが、米どころのふるさとは、いろいろのワタシ（足のついた焼き網）の上に、味噌をぬりシソの葉をつけた焼きおにぎりがあったのを思い出される方も多いでしょう。旧暦の五月の節句の頃は笹巻きにきなこ。じゃが芋の収穫がすむと、小さく芋は洗って、大鍋で皮がシワシワになるまで煮こみ（シヨッパ煮）、だんごの様に串にさして食べましたね。秋蚕の頃でしょうか。くるみゆべしやいが餅なども、農家で自前の材料を上手に利用して作る上等のおやつ。寒い冬はみそ餅やこうじの甘酒。「手塩にかけて育てた」という言葉の様に、心を育てる食生活の面で、子育てにこれだけ手をかけていたことは素晴らしいと思います。

最上川から日本海、若狭の港から京都と、産物の交易と共に文化も直結していましたが、行事の

日の料理は京風の薄味で、法事の料理などは京都の寺でごちそうになる精神料理と似ています。平常は農村のつましい生活をしていても、来客の時にはどこの家でもあれだけのもてなし料理を作っていたことに食文化の浸透を誇れると思います。ハレの食事として、全国的に餅つきがあげられますが、米作・養蚕を主にした置賜地方では、年間に何回餅つきをしたのだろうか。『モチの文化誌』の中に秋田の農家における「年中行事と餅をつく量」の例が載っていますが（年間37回）、ふるさとも農作業で一区切りつくと田植餅・刈り上げ餅。蚕があがると蚕餅。夏の疲れが出て、これから収穫の忙しくなる時期には三九日の餅。このように、生活の流れの中に餅つきをすることで節目をつけています。あまり豊かではない米沢藩の領地だった置賜ですが、鷹山公の質素儉約、労働に見合う食生活の教えを基にしながら、恵まれた自然の条件を最大限に生かして工夫された自給自足の食文化に脱帽です。行事食や栄養学的評価などについてはその道の専門の方が書いておられるし、『出羽路食の旅』にもあるので私が書くまでもありませんが、これは人の心を育て、家族の和をつくり、小単位の社会構成というか、多人数で生活していた農家の経営学という面でも評価される食文化だなと、ふるさとの食文化を誇りに思い書かせていただきました。餅つきと言えば、その日は家中がつどって餅をつき、主人家族・奉公人があついあんこ餅や雑煮餅をふうふうさましながら食べるのです。一家のきずなを確かめ、栄養をつけて明日への労働に向ける、愛情と思いやりのこもった食事は心を育てる最高の糧です。

隣近所の主婦がお茶飲みに誘い合い、それぞれの煮物や漬物の味を評価し合い伝え合って向上させて来たことも、また女性がさげすまれることなく、食の文化を高めて来たという誇りを感じます。幼い日のふるさとの良き思い出が懐かしいのも、東京の生活が長いからでしょうか。でも、やっぱり長井の里はいいなあ！（昭28卒）

あの人・この人



内山 フサ

2年前、東方会館で行われた同窓会に久しぶりに出席させていただきました。華やいた雰囲気の大盛會に、新参者の私は圧倒されてしまいました。御年配の方や、熟年の方（一番多いかな？）や、そして高校出たてのびちびちした若者まで、老いも若きも一堂に会しての乾杯、中でも女性軍の多さとあでやかさには時代の移り変りを感じ、末だがり発展する鷹桜同窓会を目のあたりにして、さまざまな思いにひたってまいりました。

かつて昭和45年頃、千駄ヶ谷の協弘会館での同窓会の折には、妹と青山さんの3人で出席させていただきました。心中では数年前のこのように思っておりましたが、あれから早くも20年の月日が経過し、時の速さに驚いています。当時はまだ30代で、子育てや日常の雑事に追われて、色々な気苦労があり、久しぶりに懐かしい顔に会えるのを楽しみにしておりました。ところが、会館に着きあたりを見回すと、目に入るのはそうそうたる男性諸氏ばかり、それも威風堂々とした、近づこうにも恐ろしげな方ばかりで、案内をしてくれたのは昔の同級生にもかかわらず、おずおずと後ずさりしながら帰ってしまい、「私たちのような若い女性の出る場所ではなかったんだ」と話していたことを思い出します。そんな私も初老と言われる年代になり、社会で堂々と生きております。家庭と仕事と趣味（ソシアルダンス）と、忙しい毎日です…。

役員さんや幹事さんのひとかたならぬ御尽力、そして皆さんの協力とありますが、いまこのように盛大で賑々しいまでの同窓会に発展して来たのかと、自分と時代の流れを重ね合せて感無量の思いでした。

つぎの機会には、妹と実家の姪（東京在住）と3人揃って出席しようかと、話をして楽しみにしております。
(昭26卒)



守屋 光和

アトラスシステム(株)
取締役社長

先日、編集委員の丸川君から原稿依頼がありました。私はこのような文章を書くのが大の苦手です。困ってしまったのですが、彼とは高校時代に同クラスであり、協力せねばと思ひ筆をとりました。先生の思い出と私の近況を少し書きます。

1年の時、担任は佐藤祐二先生でした。教室の掃除は当番制だったと思いますが、私は出口のすぐ側で真先に出られる所におり、終業のベルが鳴った途端帰ろうとし、階段へ急いだその前で待ち構えられ、思いきり叩かれたこと。

2年の時は、バスケット部に所属し顧問は高橋実先生でした。確か米沢での県予選だったと思うのですが、勝てそうな試合に負けてしまい、部員全員が体育館の外で“喝”を入れられたこと。

3年の担任は、水野多聞先生でした。全員受験勉強に励んでいる頃です。私は防衛大に合格が決り意欲がない時です。授業中名指して怒鳴られてしまいました。その後、先生より全員がダレており気を引き締めるためだったと説明を受け納得したものでした。今では懐かしい思い出です。

さて次に私事ですが、昨年コンピューター産業の一翼であるソフトウェア開発専門の会社を設立しました。21世紀は高度情報化の時代だといわれます。「情報」が社会を動かし、企業を変貌させていきます。しかし、こうしたダイナミックな変化の中にあっても、その中心は「人間」です。システムを作るのも使うのも人間だからです。

私たちアトラスシステム(株)は、人と人とのハーモニーをテーマに信頼をかたちにし、変容する時代にチャレンジしています。若さとチャレンジ精神、そして独創性をもって私たちは「情報」の大海原を開拓する新しい時代のフロンティアをめざします。チャレンジ精神の旺盛な方、ソフトウェアを知ってみたい方、一言声をかけて下さい。会社の電話番号：03-5688-3475 (昭39卒)

鷹 桜 通 信

高橋里ん(大14卒) 会報をありがとうございます。野川の橋を渡って通学したあの頃が、たまたまなくなつかしく思い出されます。出席できず残念です。御盛況をお祈り致します。

斎藤高道(昭11卒) 戦前に卒業なので、会員の皆様から見れば、まさに過去の人のように思われるかもしれませんが、会報を見てから急に若さがもどって、昔の校風に浸った気分になり、会員の皆様と親しく話してみたくになりました。会報にありましたように、画家の菅野力蔵氏のように、私も安倍栄作先生から指導を受けほめられたことがあり、画家になろうかと夢を見たことがありました。その先生は今ご健在でおられますか。皆々様のご幸福と同窓会の発展を祈ります。

三浦あさ子(昭12卒) 会報と同窓会の御通知ありがとうございます。いつもお世話になります。存じ上げている方たちの通信をなつかしく拝見して、昔のおもかげをしのんでいます。

木村マサ(昭13卒) 会報を読ませていただきました。大正も遠くになりけりか。若い方の活躍が目立ってきましたのが、たいへん心強く感じられました。三鷹市大沢に住んでから、ずうっとICUの婦人会で世界の方々と一緒にいろんなプロジェクトに参加できたことを、生涯の誇りとしております。今は若い人たちと絵を習って楽しんでいます。人生80年では何もしないではおられませんから…。会の発展を祈っております。

山脇とみ(昭17卒) ご案内いただき誠にありがとうございます。いつも出席できませんので、会報を楽しみにしております。どうぞよろしくお願いします。ご盛会をお祈り申し上げます。

佐野シン(昭21卒) お世話になります。事務運営費、59年から5年分お送り致します。58年に墨田区の八広から同区東向島に移転しました。同窓会の返信葉書か送金の振替用紙に記載してお送りしたと思うのですが、通知が届かず、心なくも滞納いたしました。昨年、旧住所地近くの友人が届けてくれましたので、遅くなりましたが本日、御送金申し上げます。

横山愛子(昭22卒) 事務局ほか、役員の方々に厚く御礼申しあげます。当日は亡父の法事を予定しておりまして、たいへん申し訳ございませんが欠席させていただきます。会報もずっととじ込

み致しまして、なつかしく拝見させていただいております。御盛会をお祈り致します。

小口 翼(昭22卒) この3月に41年間の教職にピリオドを打ち、地域の革新懇話会など、民主運動に専念しています。政治的激動のなかで、張り合いのある毎日を送っています。

美坂修典(昭23卒) 知人の結婚式と合憎重なり失礼いたします。久しぶりに内容の充実した会報に接して、嬉しく思いました。

金田忠吉(昭26卒) 当日は、コロンビア国カリ市所在の国際熱帯農業研究センターの理事会に参加のため、出張中となり出席できません。

畦田きぬ子(昭27卒) なつかしい人々との出合いを待ち望んでいる私なのに、時間の都合がつきませんので残念です。たのしい会でありますよう、念じております。皆々様によろしく!

佐藤すみ江(昭27卒) 会報の表紙のお写真、たいへん懐かしく拝見いたしました。昭和21年に長井高女に入学。真白い制服姿などとくに忘れて、黒ずんで大きくふくらんだ甘い桑の実を学校帰りに食べて、紫色に服を汚して母に叱られましたっけ。お腹もすいている時間だったんですね。

木村 繁(昭28卒) 同期会の近況を一言。東京在住の同期会を9月17日(日)に開催。47名出席。毎年のことだが、年々孫の数が増え、…という話が多くなり、ここ数年、仲間の親密さが増したようだ。55歳はまだまだ若い?

佐竹きみ(昭29卒) 事務局の皆様、いつも御苦勞様です。大世帯の運営ですから、「十人十色」。あちら立てればこちらが立たずは当然のこと。がんばっていただきたいと思います。御健康に留意されて…。

長谷部秀子(昭30卒) 役員の皆様、本当に御苦勞様です。あわただしい毎日に、同窓会報は私だけの何ともいえぬ世界にひたらせてくれます。総会には出席いたしません、会報を楽しみにしている一人です。前回分未納なので、2回分お納めいたします。御発展をお祈りいたします。

道家和人(昭30卒) 父親の勤務の都合で小国町へ移り住み、3年間長井高校にお世話になりました。東京に戻ってからも級友諸兄に会う機会もなく、同窓会に出席したい気持ちは大ですが、気恥かしさが先にたちます。いつの日か、同窓会にも出席させていただきま。運営費のみ送金させていただきます。同窓生皆様の御健勝をお祈り

申し上げます。

上村千枝(昭31卒) 四季折々に、ふるさとの思い出すことの多い年齢になりました。年々なつかしさは増しますのに、反比例で疎遠になっていきますので、会報は待ち遠しい便りです。役員各位の御苦勞に心から感謝いたします。

小関敏子(昭32卒) 会報にて、なつかしい先生、そして知人のその後にふれ、一気に〇〇年前を思い出しました。改めて恩師への感謝の気持ちで一杯です。御尽力下さいました皆様、ありがとうございます。

山水まさ(昭32卒) いつも同窓会報、総会案内をありがとうございます。今は楽しみに読ませていただいているだけで、何のお力添えも出来ず申し訳ない気が致します。公私とも御多忙の中で御活躍下さる方々の御奉仕には、ただただ頭が下がります。何かと御苦勞の多い様子をお察し致しますが、蔭ながら応援させていただいておりますので、これからもどうぞよろしくお願い致します。御発展を心からお祈り申し上げます。

平田 侃(昭34卒) 今年は勤務先の運動会と重なり残念。しかし、今年5月、上の山において30年ぶりで昭和34年卒の同窓会に行き参りました。涙が出る思い。高校時代の顔を思い出すまで大変でした。次回の東京支部の総会では同級生に会いたいものです。皆様によろしく。

諏訪廣子(昭36卒) 会報ありがとうございます。松坂先生のお写真と文章に接して、なつかしさのあまり、高校時代の思い出にひたり時を忘れてしまいそうになりました。浮草のように思っていた都会での生活でしたが、心の根っ子がしっかりと生えていたことを知りました…。

松田芳子(昭38卒) いつも同窓会報を送って頂きましてありがとうございます。知っている方の名前を見つけると、懐しさでいっぱいになり、高校時代の一ページに重なります。あの頃、図書館通いと文芸部で忙しかったことが思い出されます。1年後輩の丸川君も、たしか文芸部だったような気がします。そして図書館でいつもお世話になった波多野さん、いつまでもお元気でいて下さい。

横山巳声子(昭38卒) 子どもの運動会のため総会は欠席いたします。同窓会報も毎回楽しみにしております。去年の山口のぶ先生、今年の松坂俊夫先生と、昔お世話になった先生方が今でもお元気で御活躍の御様子で、高校時代がとてまなつ

かしく思い出されます。

荒谷英子(昭38卒) 会報を懐かしく拝見いたしました。松坂先生のお元気で御活躍の御様子に嬉しく思い、授業風景を思い出しました。

紺野純子(昭39卒) 会報8号の武田さんの交響讃歌「やまがた」の公演のお話を興味深く読ませていただきました。と申しますのは、私「東村山市民合唱団」に在籍しておりまして、交響讃歌「やまがた」から抜粋した混声組曲「最上川の四季」を10月の定期演奏会で演奏すべく、名指揮者のもと猛練習を重ねている最中だからです。団員60名の合唱団で平均年齢も高いのですが、心をつ一つにして頑張っています。故郷を離れて20年近くになりましたが、「最上川の四季」を練習しながら、遠い故郷に思いをめぐらしています。

福田美奈子(昭39卒) なつかしい方々が出ていらっしゃる会報を、高校時代の様々な思い出を浮かべながら読ませていただきました。

磯谷幸子(昭41卒) 1回だけ出席させていただきましたが、同じ世代の方々がほとんどなく、ちょっと淋しく感じました。もう少し年代の若い人たちにも呼びかけていただきたいと思います。

今野すみ子(昭43卒) 総会の御案内ありがとうございます。いつも出席できず、申し訳ございません。仕事に家事にと追われる毎日です。皆様の御健康と御多幸をお祈りしております。

井澤小一(昭45卒) 同窓会報を毎回楽しみにしております。毎年、夏には帰省しておりますが母校の変容には驚いております。ますますの母校の発展を祈っております。

筒井美佐子(昭48卒) 初めて会報をいただきました。まだ子どもが小さいので、総会へは出席出来ませんが、いつの日かきっと参加したいものです。これからもよろしくお願い致します。

阿部ふさ子(昭49卒) 昨年はじめて出席させていただきました。諸先輩方がさまざまな分野で御活躍されているのに深く感銘を受けました。今年は学校行事と重なり、出席することができません。残念に思っております。鷹桜同窓会の益々の御発展をお祈りいたします。

編集委員より 今回は、会報に関しての御感想を数多くお寄せいただき、どうもありがとうございました。とくに松田芳子さんと福田美奈子さんからは名刺しでお便りをいただき、恐縮でした。今後も、皆さんからの御意見をどうぞお寄せ下さい。

フ ォ ト ブ レ イ ク



①



④



②



⑤



③



⑥

綿谷邸における昨年の東京鷹桜同窓会総会案内状の発送準備作業の様子(①～③)と、
渋谷の東急ゴールデンホールにて開催された総会の一コマ(④～⑥)。

昭和27年卒同期生有志から多額の寄付金いただく！

中川 孝氏をはじめ、昭和27年卒同期生有志の皆さんから、東京鷹桜同窓会の会報発行活動支援のため多額の寄付金をいただきました。ここに記して厚く御礼申しあげます。
(敬称略・順不同)

寺 嶋 武 彦	[寺嶋歯科医院]	〒993 長井市本町 2-7-27	☎ 0238-88-2903
斎 藤 健 次 郎	[斎藤産婦人科医院]	〒999-22 南陽市三間通 280	☎ 0238-43-2550
斉 藤 和 夫	[(株)長井観光はぎ苑]	〒993 長井市成田	☎ 0238-84-1387
寺 嶋 清 助	[寺嶋医院]	〒999-11 飯豊町大字手ノ子 1453	☎ 0238-75-2004
横 山 哲 夫	[横山外科胃腸科]	〒243-04 海老名市国分寺台 5-13-1	☎ 0462-32-6767
福 田 春 子	[福田商事(株)]	〒150 渋谷区恵比寿南 2-5-8-601	☎ 03-712-5779
奥 山 利 夫	[小国中学校]	〒993 長井市中道 1-3-29	☎ 0238-88-3757
四 釜 正 志	[美研おしゃれの館]	〒993 長井市四ツ谷 1-12-2	☎ 0238-84-3233
橋 本 昭	[山形松坂屋]	〒990 山形市江南 2-11-8	☎ 0236-84-9034
梅 津 治 兵 衛	[ヤマニ住建]	〒992-08 白鷹町大字荒砥甲 1383	☎ 0238-85-5781
小 田 切 道 子	[オダギリ薬店]	〒242 大和市大和東 1-7-1	☎ 0462-61-1193
赤 間 久 子	[赤間歯科医院]	〒993 長井市館町南 17-8	☎ 0238-88-2218
加 藤 綾 子	[芳文社]	〒993 長井市十日町 1-9-2-2	☎ 0238-84-2148
大 場 八 朗	[ねぎし丸昇]	〒116 荒川区東日暮里 4-2-2	☎ 03-807-0620
丸 川 光 子	[丸川肉店]	〒993 長井市中道 2-8-7-5	☎ 0238-84-2983
中 川 孝	[中川石油]	〒273-01 鎌ヶ谷市栗野 119	☎ 0474-43-6098

以上16名の方々より、合計金額155,000円を頂戴いたしました。ありがとうございました。

* 平成元年「新人歓迎会」時の寄付金明細

(敬称略、卒業年順)

川野カツ(昭2卒)	綿谷琴子(昭28卒)
倉島 米(昭4卒)	土屋東一(昭35卒)
高橋正二(昭7卒)	荒生保男(昭37卒)
桑島従子(昭7卒)	石井宏子(昭37卒)
吉田志津(昭9卒)	丸川 満(昭39卒)
安部欣一(昭15卒)	中山和弘(昭45卒)
中川 孝(昭27卒)	計13名 242,000円

* 平成元年「総会」時の寄付金明細

(敬称略、卒業年順)

高橋正二(昭7卒)	土屋東一(昭35卒)
貴志悦子(昭26卒)	坂本キミ子(昭35卒)
綿谷琴子(昭28卒)	計5名 57,000円

* 例年、「総会」時には長井の鷹桜同窓会本部より長沼酒造菰被り「小桜」を頂戴しています。ここに記して厚く御礼申し上げます。

◇ 事務局からお知らせ ◇

(1) 行事・活動の記録

元年8月27日 東京鷹桜同窓会の平成元年の総会開催のために、綿谷邸にて準備を行った。世話役（担当学年：昭和29・35年）の皆さんの協力により、約3,150通の案内状・会報等の発送を完了した。

元年10月1日 東京鷹桜同窓会定例総会が、渋谷の東急ゴールデンホールにおいて、赤堀綾子さんの司会で開催された。参加者は129名。母校より今田校長、本部副会長の渡部氏、平野支部長の今野氏、事務局の菅原氏が出席された。

また、今総会で東京鷹桜同窓会会則の改正案を事務局より提出され、承認されました。改正の条項は次の2点である。

・第10条1. 総会は毎年1回開くこと。（10月第3日曜日の部分を削除する）

・第12条 本会の会計年度は4月1日に始まり3月末日に終る。（会計年度の月日変更）

つぎに、懇親会に入り、恒例の学年紹介が行われ、また高石氏（昭20卒）の尺八の演奏をはじめシャンソン、民謡の飛び入りもあってにぎやかに会は進行した。最後に、新人の渡部朋広君のメール交換で閉会となった。

元年11月15日 六本木の露店において、役員および事務局会議が開かれ、担当学年の皆さんにも参加していただき、慰労会を兼ねた反省会を行った。

2年2月3日 高橋会長が長井本部の支部長会議に出席された。

2年2月5日 役員および事務局会議を虎ノ門の土屋・小串法律事務所で行った。平成2年度の総会と学年幹事会の日時、会報等について協議を行った。

2年6月1日 土屋・小串法律事務所にて事務局会議を行った。学年幹事会の準備と、当日行われる議題内容等について協議した。

2年7月6日 原宿の水交会において学年幹事会が開かれた。出席者36名。東京鷹桜同窓会の名簿作成（東京・神奈川・埼玉・千葉）、総会案

内における発送作業の合理化等について協議、承認された。また、学年幹事不明学年の空白の補充問題が出されたが、継続して広く交渉を重ねていくことになった。

昨年、会報発行活動予算の不足とその解決策が問題となったが、中川孝氏（昭27卒）の御努力で東京鷹桜同窓会では多額の寄付金をいただいた。事務局からその報告と中川氏への謝辞が述べられ、一同から大きな拍手が贈られた。なお中川氏から、このような寄付金担当は今年は他のひとにお願いしたいとの申し出があったが、立候補の声はあがらなかった。中川氏関係の寄付金御提供者については、前ページを御覧ください。

会議の後は、母校70周年記念行事に出席された方々によるお話（その模様や感想）があり、またなごやかな自己紹介を通して懐かしい思い出話に花が咲きました。（石井宏子）

(2) 平成元年度会計報告

（平成2年3月31日現在）

<収入>		<支出>	
前年度繰越金	1,248,732	総会費	771,660
総会会費(135名)	945,000	新人歓迎会	552,104
役員・幹事会費	152,751	会議費	297,696
新人歓迎会費及びカンパ	317,000	通信費	292,882
祝金	45,000	事務費	3,068
広告費	212,000	印刷費	
事務費(688口)	688,000	(会報含む)	264,358
補助金(本部より)	10,000	振込手数料	36,410
受取利息	8,525	交通費	35,500
		渉外費	30,000
計	3,627,008…A		2,283,678…B
A-B=1,343,330：(次年度へ繰越)			

（末吉暁子）

編集後記 会報第9号をお届け致します。今回も、御執筆された皆さんのお蔭で大変充実した内容のものが出来上りましたことに、心から感謝申し上げます。

ところで、この会報をつくるのに6月から8月までの3ヶ月間、日曜日を使って数十時間が必要です。私も非常に多忙な毎日を送っておりますので、事務局とも相談してもう3～4人編集委員を増やしてもらうことにしました。どなたかお手伝いをしていただけませんか。（丸川 満）